

論 説

地域資源としてのカツオを用いた初任者研修制度の効果 －沖縄県宮古地区におけるカツオ産業体験プログラムの事例検討－

若林良和 (産業イノベーション学科)

川上哲也 (愛媛大学大学院連合農学研究科)

Effect of “First Designation Person Training” Using by the Skipjack Tuna as Regional Resources
: Case Study about Skipjack Tuna Industry in the Miyako Area, Okinawa Prefecture

Yoshikazu WAKABAYASHI (Industrial Innovation)

Tetsuya KAWAKAMI (United Graduate School of Agricultural Sciences, Ehime University)

キーワード：地域資源、カツオ、初任者研修、価値共創、地域理解教育

Keywords：Regional resources, skipjack tuna, First designation person training, Co-creation of value, Regional understanding education

【原稿受付：2017年6月29日 受理・採録決定：2017年7月14日】

要旨

本論文の目的は、地域資源としてのカツオを活用した、新任教諭を対象とする初任者研修制度の効果を分析することである。この取り組みは、地域の基幹産業であるカツオ産業（カツオー本釣り漁業と鰹節製造業）体験を取り入れたもので、全国的に稀有な事例、さらに、地域特性を踏まえたユニークな実践と位置付けられた。本論文は、沖縄県宮古地区で1996年～1999年に実施されたプログラムを体験した教諭へのインタビューもとに、研修に対する評価と教育実践への展開を検討したものである。地域的・教育的な効果として、地域に関する価値共創（地域を総合的に理解する教育を介して、地域に対する愛着や誇りの醸成する端緒になること）、水産の価値共創（地域水産業に対する理解の拡大、その最適化を検討する契機となること）、教育における価値共創（地域の同質性と差異性、融合性や複合性から「地域理解教育」の新展開があり得ること）の3つが想定できた。

1. はじめに

昨今、地域活性化や産業振興のため、地域資源をもとにした理論的な検討や実践的な活動に関する議論には、枚挙にいとまがない。これまでに筆者もいろいろと検討してきたが、直近では地域の特産品であるカツオを事例に、浜言葉を用いたカツオのブランド化のプロセスから、地域資源と価値創出に関する再検討を試みた。¹⁾ 地域資源とは、いうまでもなく、地域に存在し、産業振興や地域活性化の端緒や起爆剤となり得る資源である。そうしたなかで、地域資源であるカツオを活用した教育・人材育成の分野における取り組みとして、筆者は「ぎょしょく教育」の実践と評価、「枕崎カツオマイスター検定」の実施と効果を検討してきた。²⁾ その検討から、カツオをはじめとする水産物そのもの、さらに、水産業や漁村に内包された諸事象が地域資源としての大きな役割を果たすことは明らかである。そして、新たな価値共創のために先導的で継承的な役割を持つのは地域資源である。

本論文では、地域資源であるカツオを活かした取り組みのなかで、カツオ産業（カツオー本釣り漁業と鰹節製造業）体験プログラムを取り入れた新任教諭対象

の初任者研修制度を分析する。これは以前に沖縄県宮古地区で実施されたもので、全国的に稀有であり、地域特性を踏まえたユニークな取り組みとして注目された。1996年～1999年に体験した教諭へのインタビューをもとに、カツオ産業体験プログラムを中心とした初任者研修制度の効果について検討することが本論文の目的である。

2. 地域資源の定義

地域資源は、地域住民の意識からみると、「意識された資源－意識されてこなかった資源」に区分され、地域資源化というプロセスが重要となる。次に、価値や評価からすれば、「プラスの資源－マイナスの資源」に二分されて、価値の転換や創造が求められる。さらに、実態把握からすると、「可視的な資源－不可視的な資源」に区分けられ、価値の実質化が重視される。³⁾ 地域資源は、産業振興や地域活性化を念頭に置けば、地域協働により再認識と発掘、利活用へと展開するための教育コンテンツにもなるだろう。⁴⁾

地域資源は地域住民がプラスの評価を付与して地域

の発展に利活用できる資源と定義できる。したがって、水産業や漁村も地域資源として重要な位置を占める。水産業そのものと、それに関連した漁村の景観や年中行事、民俗芸能、食文化は地域資源として位置付けられ、「地域理解教育」のコンテンツとなり得る。⁵⁾

3. 地域の概要

沖縄本島から南西約300キロに位置する宮古地区は、宮古本島など大小6つの島で構成され、人口約5.2万人で、サトウキビやマンゴーなどの農業や観光業、漁業が基幹産業である。まず、漁船漁業では、パヤオ（人工浮魚礁）を用いた竿釣り、流し釣り、引き縄漁業であり、カツオやマグロが漁獲されている。カツオは宮古島市の「市の魚」に指定され、当地で1982年にパヤオ操業が沖縄初で着手されたことから8月8日を「パヤオの日」と2007年に定めた。このようにパヤオによるカツオ漁業は地域の漁業にとって重要な存在である。次に、海面養殖業ではクルマエビやモズク、ウミブドウなどが盛んに行われ、栽培漁業でタイワンガザミやシャコガイ、ハマフエフキなども放流されている。⁶⁾

宮古地区の漁業生産量と漁業生産額は減少傾向にある。2013年の生産量は2,501トンとピーク時（1991年の約2.3万トン）の約11%、同年の生産額も約8.4億円とピーク時（1991年の約38.1億円）の約22%にとどまり、増加の兆しは見られない。（表1参照）

表1 宮古地区の漁業生産

	生産量 (トン)	生産額 (千円)
1991年	22,679	3,813,667
1996年	4,009	2,168,143
2001年	3,209	1,365,193
2006年	2,855	1,220,789
2010年	1,585	718,814
2013年	2,501	841,603

資料：宮古農林水産統計年報

表2 カツオ産業体験プログラムの参加者（新任教諭）

	洋上実習	陸上実習	合計
第1回	10人(小・男1 中・男9)	8人(小・女1、中・女7)	18人
第2回	9人(小・男1 中・男3 小・女3 中・女2)	4人(中・女4)	13人
第3回	6人(小・男2 中・男4)	10人(小・女6、中・女4)	16人

資料：『かつお』（初任研修会報告集）

4. 初任者研修制度の内容

(1) 制度の概要

初任者研修制度は、教育公務員特例法第20条の2（昭和63年5月改正）の規定に基づき、小・中・高等学校などの新任教諭に対して、現職教育の一環として1年間の研修を実施するものである。その目的は、職務の重要性と特殊性、教員としての使命感、児童生徒に対する教育的愛情、教科等に関する幅広い専門的な知識、広く豊かな教養、実践的指導力などの教員に求められる資質や力量を養い、教員としての自覚を高めることにある。

研修内容は、校内研修、教育センター等での研修、宿泊研修の3つで構成される。校内研修が赴任校で実施されるのに対して、後者の2つは校外研修で、教育センター等研修に位置付けられる。

(2) 宮古地区の初任者研修会

1) 初任者研修会の位置付け

初任者研修会は、宮古地区の基幹産業であるカツオ産業を通して、3つの目的（①地域の理解を深めること、②教材の発掘や創造に努めること、③参加者の相互親睦と地域交流を図って人間関係を深め識見を高める機会とすること）を完遂にすることである。カツオ産業体験プログラムを通して、郷土への理解と識見を高めて教員生活を営むことが研修の趣旨である。「地域の良さを知り、地域と共に育つ」という研修方針のもと、特色ある研修、地域の伝統・文化の継承や発展を視点に置いた授業づくり、地域の刊行物や人材の活用を推進することにした。主催は宮古地区5市町村教育委員会で、宮古教育事務所が後援となっている。なお、研修実施にあたり、池間漁協やカツオ漁船3隻の船主、鰹節工場2か所の責任者から深い理解と絶大な支援があった。

2) 初任者研修の内容

研修内容を概括すると、まず、対象は各年度に宮古地区へ配属された小中学校の新任教諭である。次に、内容は洋上実習（カツオ漁船に乗船したカツオ一本釣り体験）と陸上実習（鰹節工場での鰹節製造体験）の



写真1：カツオ産業体験学習洋上実習
(カツオ一本釣り・解体)



写真2：カツオ産業体験学習洋上実習
(カツオ一本釣り・漁獲)



写真3：カツオ産業体験学習陸上実習
(鰹節製造・生切り)



写真4：カツオ産業体験学習陸上実習
(鰹節製造・修繕)

2つである。洋上実習では、男子教諭と一部の女子教諭が出港から活餌採捕、魚群探索、パヤオ周辺海域での釣獲、漁獲物収納、帰港という一航海を体験した。陸上実習では、女子教諭のみが生切り、カゴ立て、煮熟、骨抜き、焙乾、修繕、再焙乾、日乾という一連の作業工程を経験した。(写真1～4参照)

研修会に参加した新任教諭は3年間で合計47名である。経年的には、1996年度18名(男子10名、女子8名)、1997年度13名(男子5名、女子8名)、1999年度16名(男子6名、女子10名)であった。(表2参照)

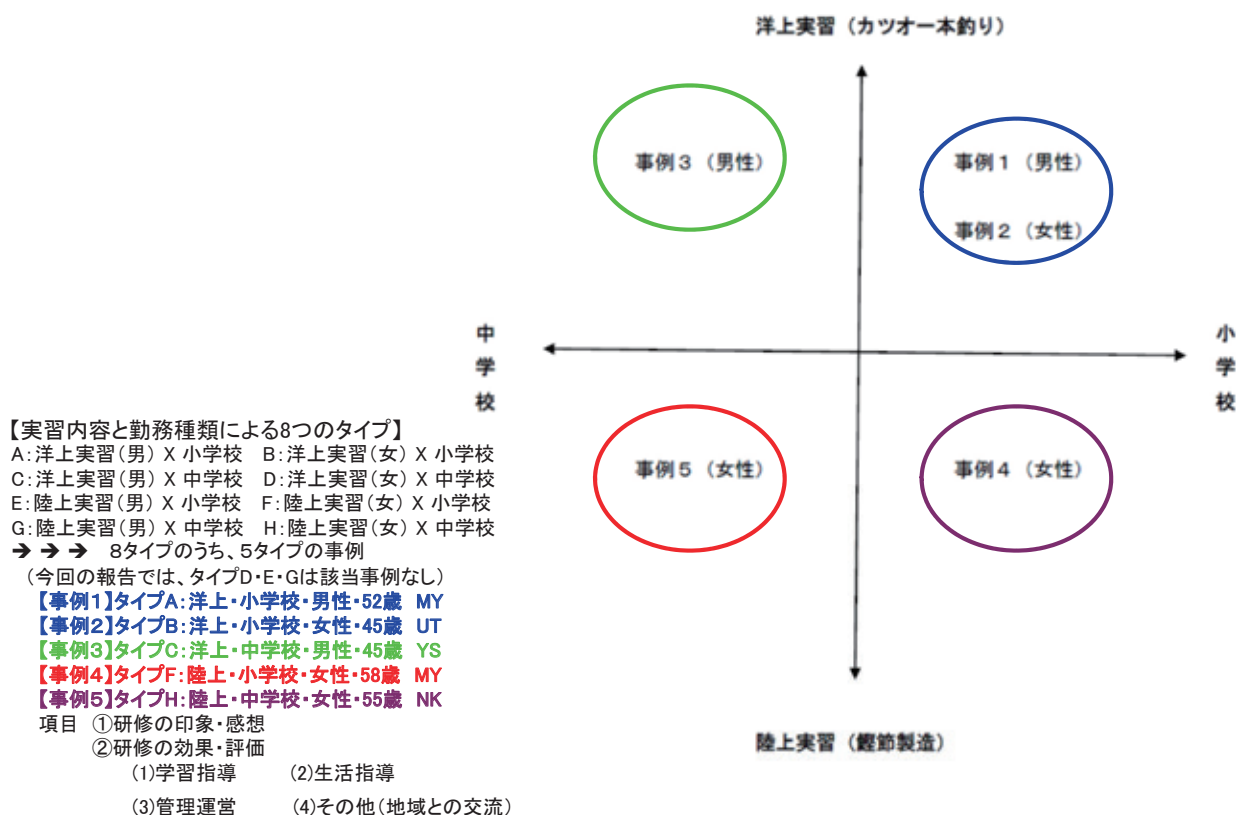
第1回初任者研修会は1996年8月7日に実施された。宮古地区5市町村教育委員会主幹ら担当者6名が引率し、洋上実習には男子教諭10名(小学校1名、中学校9名)が池間漁協所属のカツオ漁船3隻(宝幸丸、吉進丸、八幸丸)に分乗し、陸上実習には女子教

諭8名(小学校1名、中学校7名)が池間島の鰹節工場1工場(川満鰹節製造工場)に参集し、それぞれ従事した。

第2回研修会は1997年7月31日に実施された。第1回と同様に、5市町村教育委員会の担当者6名が引率し、洋上実習には男子教諭5名と女子教諭4名の合計9名(小学校4名、中学校5名)が前年と同様にカツオ漁船3隻に、陸上実習には女子教諭4名(中学校教諭4名)が同じ鰹節工場に、それぞれ参加した。

第3回研修会は、1年間のブランクがあった後、1999年7月31日に実施された。これまで同様に担当者が引率し、洋上実習には男子教諭6名(小学校2名、中学校4名)が同じカツオ漁船2隻(宝幸丸、吉進丸)に分乗し、陸上実習には女子教諭10名(小学校6名、中学校4名)が島内の鰹節工場2工場(新たに丸吉鰹節製造工場)で参加し、それぞれ従事した。

図1：5事例の位置付け



5. 研修に対する評価と教育実践への展開

(1) 事例紹介

研修会参加の新任教諭(宮古地区での現職教諭)を対象に、当時の研修に対する現在の評価と現在の教育実践への展開に関する事例分析を行った。今回の事例分析に向けた類型には、そのメルクマールを実習内容(洋上実習-陸上実習)と勤務種類(小学校-中学校)とし、それらに性別(男性-女性)を付加すると、8事例・タイプが想定できる。それらのうち、男性教諭で陸上実習の事例がなく、また、対象者が見つからない事例もあり、今回の分析は5事例・タイプとなった。(図1参照)

次に、対象者へのヒアリング項目は、①研修の印象と感想(当時のことで現在も忘れられないこと)、②研修の効果と評価(現在の教育実践<学習指導、生活指導、管理運営、地域との交流の4領域>で役立っていること)の2つである。以下、その結果を略述する。

【事例1】タイプA(洋上実習(男性)・小学校(教頭)・52歳・M.Y.)

(1) 研修の印象と感想

- * 大海原で跳ねるカツオが釣り上げられて宙を舞う様子は圧巻であった。
- * 高齢の漁業者が多く、その将来が見通せないことを実感した。
- * 活餌の追い込み、カツオとの格闘など一糸乱れない一連の作業、船長の操船、餌投げと釣りのチームワークなど、すべてに感動した。

(2) 研修の効果と評価

<学習指導>

- * カツオ資源の枯渇を感じ、資源のバランスある利活用が重要であることを説明している。
- * 漁業者の後継が危機的状況であることを伝えている。
- * 漁業の歴史から、地域の生活や文化に興味を持てるように指導している。

<生活指導>

- * 漁獲から食卓までの流れに様々な人々が関わっていることを理解させ、食べることの大切さを教えている。
- * 書物の知識も重要だが、忘れられない実体験は書物以上の力を持つことを肝に命じている。
- * 全員の協力は成功を導き、人を感動させ、自分を

向上できることを実践している。

＜管理運営＞

- *カツオを追尾し釣り上げて水揚げする協力体制を組織管理に活かしている。
- *様々な事態への即応は船長の手腕次第であり、リーダーシップのとり方が参考になっている。
- *年齢差を超えた、思いやりのあるコミュニケーションの重要性を伝えている。

＜地域との交流＞

- *赴任校で地域との関係づくりに大きく役立っている。
- *地域関係者との協力は、生徒指導の推進にも不可欠である。
- *地域の宝物である児童は地域で成長するという認識で教育している。

【事例2】タイプB（洋上実習（女性）・小学校（教務&学年主任）・45歳・U.T.）

（1）研修の印象と感想

- *早朝の出航後にカツオを迅速に釣り、朝食時の甘いミルクを飲み干すカツオ漁業者の力強さに驚いた。
- *漁船からシャワーのように噴き出す海水で、カツオを寄せ集める工夫に感心した。
- *2秒に1匹の割合で釣り上げられるカツオ。カツオの血で真っ赤になった甲板の光景は圧巻で、カツオ一本釣りには見た目より力を必要としたこともあり、釣りが上手いかなかった。

（2）研修の効果と評価

＜学習指導＞

- *自らの実体験から、漁業者の知恵や工夫、自然の恵みを児童に伝えている。
- *私達に提供される食事に感謝の気持ちを持てるように指導している。
- *一本釣り漁法がカツオ資源保全につながることで、燃油高騰などの諸問題があることから、今後の水産業のあり方を考えさせている。

＜生活指導＞

- *食べ物を粗末せず、給食時の「いただきます」挨拶励行など、躰や食育の重要性を伝えている。
- *自然との共存や恵みに感謝を込めた地域の伝統行事を理解させることで、地域への愛情や郷土愛を育める。

＜管理運営＞

- *漁業者にとって漁船は城と考え、学校行事の協力依頼をする際には、より敬意を払って依頼している。
- *地域を理解し協力し合うことで、地域への愛着が

より一層深められている。

＜地域との交流＞

- *カツオ一本釣り体験をした女性は珍しいために、漁業者が親しみを持って気さくに様々なことを教えてもらっている。
- *自分の住む地域の産業への関心が高まり、守るべきもの、活かすもの、創り上げるものなど自分の考えが持てている。

【事例3】タイプC（洋上実習（男性）・中学校（市教委・指導主事）・45歳・Y.S.）

（1）研修の印象と感想

- *漁業者の役割分担とチームワークが効率的に進められていることに感動した。
- *カツオの群れを絶対に逃がさない執念、釣り上げたときの興奮、獲物を追いかける動物的な感覚から、現代人の忘れかけた野性能が感じ取れた。
- *出港時に安全航海と大漁のために、御嶽近くで御神酒を奉納し祈願する習慣から、受け継がれてきた漁業信仰の敬虔さを体感した。

（2）研修の効果と評価

＜学習指導＞

- *海とカツオを知り尽くした海洋民族の誇り、遠洋漁業の繁栄、パヤオ漁法の開発など、日本のみならず世界に対する誇りと伝統の保存と継承につなげていきたい。
- *過酷な一本釣りで漁獲されたカツオが食卓に届くまでの仕組みを理解させながら、職業観や勤労観を育ませることができる。
- *漁船上の伝達が大きな声と身ぶり手ぶりで迅速に行われており、自分の意思を伝達する方法を教えている。

＜生活指導＞

- *漁業者全員の所属感が強く自信と誇りに満ちていることから、生徒達が学校の一員として存在感を感じる指導を目指している。
- *漁業者は互いに尊敬と信頼の絆で結ばれ、迅速で効率良く共同作業を行っていたので、生活指導で共感的な人間関係を築くことを教えている。
- *海という大自然を相手にして常に命と直面することから、学校でも安全点検の大切さと整理整頓の習慣化を図っている。

＜管理運営＞

- *一本釣りにかける誇りと情熱を体験したことは、子どもの教育に情熱を持ち、計画的で継続的に学校の管理運営の原動力となっている。
- *大漁を目的に一丸となり役割を遂行していく姿は、学校の管理運営でもベクトルを一つに合わせ

るという点で大いに活かしている。

- * 生命の危険を極力、回避するためのチェックは学校にも通じるものがあり、人的・物的管理の適材適所が重要だと感じている。

＜地域との交流＞

- * 漁業をはじめ豊かな自然を活かした地域の産業を、学校教育の資源として活用すべきだと考えている。
- * カツオ一本釣り体験のインパクトは強く、生徒達にも郷土の誇れる産業であることを教え、地域の産業や文化に触れる体験学習を進めている。

【事例4】タイプF（陸上実習（女性）・小学校（教頭）・58歳・M.Y.）

（1）研修の印象と感想

- * 父がカツオ漁業（海外の南方カツオ出漁）に従事していたにもかかわらず、その漁業のことを全く知らず、改めて父の仕事を見直すきっかけになった。
- * 当時、魚をさばくことが初体験であったが、鰹節職人の見事な包丁さばきに感動した。その後、調理実習の指導に活かすことができた。
- * 鰹節製造で多くの日数と手間を要することに驚き、良質な鰹節が造られていることに感心した。

（2）研修の効果と評価

＜学習指導＞

- * 指導時の児童への姿勢として、丁寧さとメリハリを心がけている。
- * 総合学習の地域学習で、伝統文化の大切さと継承する意義を児童に伝えている。
- * 地域の教育力を高めるために、地元人材の活用、児童のコミュニケーション能力の向上に取り組んでいる。

＜生活指導＞

- * 自然への豊かな感動と感受性の育成を図っている。
- * 魚を獲ったり料理をしたりする人達への感謝、食物の大切さを指導している。
- * 様々な道具で、仕事が成り立ち、便利に生活できることを理解させ、道具類を大切に使うことを教えている。

＜管理運営＞

- * 漁船内にみられる明確な役割分担から、学校の役割分担、後輩の指導に活かしている。
- * 漁船でのチーム活動から、全体の役割分担と責任のあり方が参考になっている。

＜地域との交流＞

- * 学校は地域と家庭の連携が基本にあり、その進め

方に活かしている。

【事例5】タイプH（陸上実習（女性）・中学校（教諭）・55歳・N.K.）

（1）研修の印象と感想

- * 実家が農家のため、鰹節製造体験は新鮮で、鰹節職人の苦労が理解できた。
- * 相互の理解や協力を体感し、後々の教員生活でも声掛けや励ましなどに役立った。
- * 製造の細かな作業に、鰹節職人の技や知恵を感じた。

（2）研修の効果と評価

＜学習指導＞

- * 天候悪化で、鰹節職人の女性たちがカツオ出漁中の夫の安否を気遣う姿が忘れられず、道徳の授業で命の大切さや家族愛、郷土愛の話題として活かしている。
- * 地域を知ることができ、随時、漁業の歴史を紹介している。
- * カツオのおろし方など鰹節製造の実態とその感動を生徒に伝えている。

＜生活指導＞

- * 漁船内の人間関係をもとに、仲間づくりのノウハウ指導に活かしている。
- * カツオを題材とした俳句づくりで、自分たちの生活を見直す機会にしている。
- * よく観察し、よく聞いて、できるようになった時の感動を伝えている。

＜管理運営＞

- * 島民すべてに役割があり協力し合っていることは学校にも通じることから、普段の取り組みに活かしている。
- * 三枚おろしを丁寧に教えてもらって上手におろせた時の感激から、学校でも助け合いや励まし合いで個人を大切にしている実践を試みている。
- * 三枚おろしを常に明るく楽しく指導してもらったが、そうした雰囲気のある職場づくりを心がけ、教職員のメンタルヘルスケアにつながっている。

＜地域との交流＞

- * 地域の産業や文化に興味や関心を持つことが地域の理解につながり、宮古の方言も少しずつ覚えて使っている。

（2）事例の検討と分析

以上、5事例・タイプを紹介したが、研修に対する印象と感想、効果と評価の検討結果を小括して、研修に対する評価と教育実践への展開を分析しておきたい。

まず、研修に対する印象と感想であるが、約20年前の体験にもかかわらず、現職教諭にとって、カツオ産業体験プログラムの記憶が脳裏に焼き付いており、鮮明な印象とプラスの感想が残存していることが把握できた。海上実習においては、カツオ一本釣りの醍醐味やカツオ漁船乗組員相互のチームワークの良さ、また、大漁満足や航海安全という深い信仰心を強調する事例が多かった。陸上実習では、初めてのカツオ三枚おろしの感動、鰹節製造の技量や工夫、職人的な技能と知恵を体感したことなどにインパクトがあったようだ。いずれも、筆舌尽くしがたい感激、日常的に接することのない貴重な体験となるとともに、熟練の技を有した漁業者と鰹節職人の働きぶりに感銘し、彼らへの尊敬と感謝の念が芽生えている。そして、地場産業や地域社会に対する理解を深めることの重要性、その指導方針や教授法の参考となっているようだ。

次に、研修に関する効果と評価であるが、漁村居住の教諭にとどまらず、漁家出身の教諭でさえも、地域のカツオ産業について若干、見聞きするものの、カツオ一本釣り体験や鰹節製造体験がないという実態が浮き彫りになった。そして、すべての事例に通底しているのは、今回のカツオ産業体験プログラムが二度と経験できない貴重で有意義なものとして高く評価されるとともに、それらが現在の教育現場における学習指導、生活指導、管理運営、地域との交流の4領域において大きな影響と効果をもたらしていることである。まず、学習指導では、水産資源や海洋環境の保全、食育の推進、命の大切さを伝える道德教育への展開、伝統的な地域の産業文化の重視と継承などである。次に、生活指導では、体験と感動によるチームワークの醸成、自己確立や共感共鳴の伴う教育の推進、自然に対する感受性の尊重、五官（感）を用いた体験の重要性などである。さらに、管理運営では、合理的で持続的な人的・物的管理運営の原動力になったこと、学校組織の相互扶助や意識向上の体制づくりの基礎になったこと、OJTの重要性などが指摘されている。最後に、地域との交流では、カツオの産業文化による地域理解の重要性、地域の教育資源の更なる探求、地域の交流と連携による体験学習の必要性などがあげられる。教諭は、児童生徒に強く正しい「生きる力」を教示する必要がある。この研修は教諭自らがそれを体得し、豊かな人間性と優れた指導力を持つ教員養成の基盤となったと考えられる。地場の社会や産業と直接的に向き合うことで振り返りと見直しが図られ、それらの見方や考え方に関してプラス志向の変化が生まれた。

今回の研修によって、通常の学校現場では体験できないことを身体全体で学び合い、この研修の所期の目的を達成することができた。そして、単に他者や地域

への理解を深化させるだけでなく、貴重な研修の体験をもとに教壇や教室での様々な指導や管理運営といった実践に活かすことで、「生きる力」を育む教諭としての生き方や教育の本質につながったと考えられる。

6. おわりに

本論文では、カツオ産業体験プログラムを通じた沖縄県宮古地区の初任者研修制度の効果について検討した。今回の事例は、地域資源であるカツオを水産コンテンツと想定し、小中学校の初任教諭に対する現職教育の一環として実施されたものである。主催者の宮古地区5市町村教育委員会のもとで、地域の漁協や漁業者、鰹節工場関係者の緻密で精力的な協働により、「地域の良さを知り、地域と共に育つ」という研修方針が完遂されたと考えられる。地域の基幹産業であるカツオ産業をもとに、宮古地区という地域への理解と識見を高め、それを各教諭の実践につながり、地域を理解するための教育を推進できるようになった。その結果、地域的・教育的な効果として、次の3点が指摘できる。

第1に、水産業や魚介類の知識に関する学びを起点に、地域の産業や社会、文化を総合的、かつ、体系的に理解する教育として、「地域理解教育」が想定される。これを介して、地域の良さを問いかけ、地域への愛着や誇り、アイデンティティを醸成するものであり、地域の価値共創による地域活性化に連動する。

第2に、魚介類に対する正確な知識と深大な興味・関心の増大によって、地域水産業に対する理解の拡大につながる。地域水産業や地魚に関する再認識により、地域水産業の最適化を検討する契機となる可能性がある。そして、地域水産物の利活用を通して、地域に対する理解と交流が広がり、地域水産業の活性化や地域資源の利活用につながる可能性も考えられ、水産の価値共創による水産振興につながっていく。

第3に、地域の社会と文化の相互作用に着眼し、周到な地域的な比較検討を行い、その同質性と差異性、融合性や複合性を明らかにすることで、教育の価値共創による「地域理解教育」の新たな展開になり得るだろう。

以上のことから、このカツオ産業体験プログラムによる初任者研修制度は地域資源をもとにした「地域理解教育」の醸成に貢献していることが明らかになった。教育における能動（教育する側）と受動（教育される側）の二面性からみれば、本論文では、能動的な側面（教諭に対する取り組み）を検討したものであり、いわば、第1段階と位置付けられる。したがって、第2段階として受動的な側面（地域の児童生徒を

対象としたカツオ産業体験の取り組み)を検討し、立体的に分析する必要がある。「地域理解教育」の役割と可能性に関する議論も、地域活性化や産業振興の方策の検討に資するものと考えられる。

注

- 1) 地域資源としての民俗語彙(浜言葉)によるカツオのブランド化を検討したものに、若林(2017)があり、詳細はそれを参照。
- 2) 「ぎょしょく教育」や「枕崎カツオマイスター検定」の実践と評価については、若林(2008)や若林(2012a)で検討した経緯があり、詳細はそれらを参照。
- 3) 地域資源の区分と意義を整理したものとしては、熊谷(1993)や長濱(2003)、若林(2004)などがあり、詳細はそれらを参照。
- 4) 筆者の意図する地域資源は若林(2002)や若林(2007)で検討したことから、詳細はそれらを参照。
- 5) 「地域理解教育」の概念を検討するにあたり、連想される用語に国際理解教育がある。これは、ユネスコの年次報告では、他国・他文化の理解や相互依存関係の理解、人権や多様性の尊重を基盤にして国際的に平和な社会を形成する市民を養成するための教育と定義される。「地域理解教育」は、資源・開発・経済・環境・人権・文化などの諸問題を検討する点で国際理解教育と一致するが、地域それ自体、あるいは、地域性を第一義的に考慮して直接的で包括的に取り上げるものである。なお、筆者の「地域理解教育」の意味付けについては、若林(2008)を参照。また、筆者は、「地域理解教育」の一形態と位置付ける「ぎょしょく教育」の実践で、水産業・漁村の多面的機能が食育推進に極めて大きな役割を持つなど、その重要性和意義・方途を考察した。地域資源が教育コンテンツとなり、教育推進の原動力が地域ネットワークや地域協働であることを例証した。この点に関する詳細は若林(2009)を参照。
- 6) 宮古地域の漁業に関する詳細は、若林(2012b)を参照。

文献

- 熊谷宏『地域資源と組織の現代的評価』(明文書、1993年)、p.189
- 祖田修・佐藤晃一・太田猛彦・隆島史夫・谷口旭編『農林水産業の多面的機能』(農林統計協会、2006年)、p.158
- 長濱健一郎『地域資源管理の主体形成』(日本経済評論社、2003年)、p.225
- 若林良和「海洋生物の地域資源化と地域社会・行政 -

クジラとカツオによる地域活性化の事例をもとに-」岸康彦編『農林漁業政策の新方向』(農林統計協会、2002年)、pp.213~233

若林良和『漁村地域における交流と連携(報告書)』(東京水産振興会、2004年)、p.280

若林良和「水産資源を生かした地域づくり -高知県中土佐町におけるカツオの地域資源化を事例として」愛媛大学地域創成研究センター編『四国のかたちを考える -四国の再評価と地域創成-』(シード書房、2007年)、pp.151~169

若林良和編『ぎょしょく教育 ~愛媛県愛南町発 水産版食育の実践と提言~』(筑波書房、2008年)、p.162

若林良和「第7章 水産業・漁村の多面的機能と食育 -「ぎょしょく教育」を通じた地域資源と地域協働の重要性-」山尾政博・島秀典編著『日本の漁村・水産業の多面的機能』(北斗書房、2009年)、pp.159~181

若林良和「カツオの多様な価値を問い直す取り組み -地域を起点とした交流・連携・協働から、新たな展開を拓く-」『漁業と経営』50(9)、2012年a、pp.24~28

若林良和「離島水産業の現状と振興策」『地域創成研究年報』7、2012年b、pp.17~24

若林良和「地域資源としての民俗語彙による価値創出 ~浜言葉を活用したカツオのブランド化を事例として~」『愛媛大学社会共創学部紀要』1(1)、2017年、pp.27~35